連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「竹下宗怡 ～自由に国境越える境界人～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2024年10月25日(金)

大友時代を生きた人々

竹下宗怡

鹿毛 敏夫

戦国時代の日向国目井（宮崎県日南市南郷町）に、竹下宗怡（頼堅）という人がいます。この人物は、現代ではとても考えられないような、国境を自由に越えて行き来するマージナルマン（境界人）でした。

宗怡はもともと、目井を中心に日向南部の南郷地域の廻船中組織（船を操って人や物資を運ぶ人々）を掌握する頭目（リーダー）です。特に、この一帯は戦国大名島津氏の領地でしたから、宗怡は、国内的には日向・大隅と京都の間を往来して島津氏向けの物資を海上輸送で調達していました。

その宗怡が、慶長元（1596）年に京都の儒学者藤原惺窩が記した「南航日記残簡」（薩摩までの旅日記）の中に、大隅国内之浦（鹿児島県肝付町）の「役人宗意竹下氏」として登場します。それによると、この年の7月13日、内之浦に滞在中の惺窩が、宗怡から「蒲萄勝酒」（ワインの一種）のもてなしを受けて歓談しています。その時の話題は、「琉球の風土を談ず。けだし宗意、琉球に寓して妻子あり。故に熟識す」というもの。内之浦役人の宗怡は、琉球（沖縄県）にも住居を有して妻子を持っているためその風土に詳しい、というのです。

さらに惺窩はこの地で、「ルスン・琉球路程記録の冊」や、「蛮人の記す所」の「世界図」を一覧しています。当時の日本人のほとんどが見たことのない、フィリピンのルソンと琉球の間の航海記録冊子や、南蛮人製作の世界地図を見ることができたのです。また、入港中の唐船を見学し、船主で泉州（中国福建省）出身の「呉我洲」と筆談。彼の子が「呂宋商賈の巨魁」（ルソン商人の頭目）であるため、これからルソンへ向かうことを聞き出しています。

自由に国境越える境界人

このように、宗怡が活動する内之浦や目井は、九州最南端に近い地理的環境から、入港する唐船を通じて中国や琉球、そして東南アジアのルソンの文化・情報を直接入手することのできる港町だったのです。

戦国時代の日本は、近代国家が地球上に定めた国境という制約に管理され、その境界線の外側（いわゆる外国）に出るには、パスポートを提示して出入国審査を受けないといけない現代とは異なります。宗怡や呉我洲のような、九州と琉球、中国、東南アジアを股にかけて活動する国際人が媒介となり、モノや情報が物理的に運ばれ、異文化の交流と融合が進められた時代といえます。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝

16世紀に竹下宗怡や呉我洲が活動した東アジアの空間